

■学校経営のポイント

「社会に開かれた教育課程」を考える

小島 宏

子どもの学校生活や学習の基盤となる教育課程の在り方が検討されている。学校が地域や社会の学校であるためには、教育課程そのものが地域や社会とつながり、社会や世界と接点を持つ必要がある。

社会とのつながりを持つ

学校は、社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持つことが重要である。そして、教育課程を介し、その目標を社会と共有して、これからの社会を創り出していく子どもたちが社会や世界と向き合い、自らの人生を切り開いていくために求められる資質・能力とは何かを明確化し、教育課程に位置づけ、育成できるよう編成することが重要である。

また、実施に当たっては、地域の人的・物的資源の活用や、放課後や土曜日等を活用して社会教育と連携を図り、学校教育を校内に閉じず、目標を社会と共有し連携しながら実現させていくのである。

現代的課題に応じる

各教科等が別々にではなく教育課程全体の中で教科横断的・関連的に、アクティブ・ラーニング、ESD、ユニバーサルデザインの授業、デジタル教科書・教材、情報教育(情報モラル)、ICTの活用、リーダーシップ教育、プログラミング教育など現代的課題に適切に対応していく必要がある。

多様性に問題意識を持ち対応する

学校は、子どもの貧困、不登校、教育機会の保障、LDやADHD、特別支援教育・合理的配慮、日本語の不自由な外国籍の子ども、異なる価値観を持つ少数の子ども、学力差、優れた能力を伸ばす教育など多様性に対して問題意識を持ち対応する必要がある。そして、これらを考慮した効果的な教育機会や体制等の条件整備により、「多様性を認め合う社会の構築」の実現を目指すことが重要である。

保護者・地域・社会との協働

これからの学校は、保護者・地域・社会に開き、子どもの教育を協働して進めていくことが求められる。具体的には、教育課程の編成に際して、それを実施する教育活動に関して、地域の人的・物的な資源を積極的に活用していくことが考えられる。

学校を開くこと(教育課程の編成・実施・評価・改善へのかかわり、学校の教育活動の公開、学校情報の公開、教育成果の評価と説明責任など)や地域に根ざした教育活動(地域は先生、地域は教室、地域は教材、地域は家族、地域は世界への入口)などという発想も必要である。

また、学校評価(自己評価、学校関係者評価、第三者評価)に保護者(限定的に子どもも)や地域の参加を得て、学校の教育活動に当事者意識を喚起し、教育力を建設的に発揮させたいものである。

全教職員の参画・参加

教育課程の内容と構造を明確にし、何を、どのように編成し、これを適切に実施し、評価・改善するというサイクルを確立させることが重要である。

そして、これら全ての過程に、教務主任をキーパーソンとして、全教職員が当事者意識を持って参画・参加し、チーム学校として組織的に協働し、不断の改善と創造をしていくことが不可欠である。

また、開かれた教育課程に関する事柄について校内研修を実施し、理解を深め、学校運営や教育活動の充実に努めることが期待される。

教育情報の積極的発信と学校評価

これからの学校は、可能な限り学校の教育情報を公開し、建設的な意見を聴取し、学校運営や教育活動に反映させていく必要がある。その鍵は、保護者や地域を学校の応援団にする工夫と努力にある。

(こじま・ひろし=元公立小学校長・(公財)豊島修練会理事長)

●答申のポイント、重要キーワード、先行実例がまるわかり！

「チーム学校」まるわかりガイドブック

【編集】加藤崇英 A5判・136頁／定価(本体1,600円)＋税

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>をご利用ください。

